



225号

2017 / 7 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



「胡同」 長い歴史を持つ北京の路地裏の風景です。陽も傾き始めたころ、外に出るのがんびりと時間を過ごす老人の姿には胡同の歴史を感じさせる静かな静かな時が流れています。(2003年11月北京胡同にて)

撮影…木村武司

一鳴驚人

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から 文と訳・有為楠 君代

中国語では「一鳴驚人」と表記します。先ず、本の中の説明です。

「戦国時代、齊の威王が王の位に就きました。齊は弱小の国でしたが、威王は政治に真面目に取り組まないで、楽しく遊び暮らしていました。大臣たちは、こんな王様を見てとても困っていました。

三年経った頃、家来の中にいた、淳于髡ジュンウコンと言う人が威王のところへ行き言いました。

『大王様、私共の国には、一羽の大きな鳥がいて、この王宮に住んで三年になります。この鳥は飛びもしないし鳴きもしません。大王様、これはどうしてなのでしょう？ 当ててみてください』

威王はとても聡明な人でした。この淳于髡が自分のことを風刺しているのだと分かりましたので、すぐに立ち上がり、はっきりと言いました。

『ああ、この大きな鳥は、もうすぐ飛び立つだろうよ。一度飛び立てば、天空高く舞い上がり、一声鳴けば、世の人々を驚かすに違いない。ま、お前はのんびりと見ているが良い』

この後、齊の威王は遊ぶのをやめ、熱心に政治を行いましたので、齊の国は日増しに強大な国になっていきました。

言葉の説明には「一声鳴けば人を驚かせるというのは、普段あまり目立たない人が、一旦仕事をすると、人々が驚くような成果をあげることのたとえ」とあります。例文は、「彼の普段の成績はまあまあだったけれど、今回の試験では一躍トップに躍り出た。全く、『鳴かなければそれまでだけれど、一度鳴けば人を驚かす』だね」とあります。

この「四字成語」、中国では、例文にあるように、「不鳴則已ぶめいぜい、一鳴驚人いみんぎんじん」と八字纏めて、「鳴かねばそれまで、一度鳴けば人を驚かす」と使い、目立たなかった人が目覚ましい成果をあげた時に、肯定的に使いますが、日本では「四字成語」としてはそのまま使われていませ

ん。齊の威王のお話は有名ですが、日本で作られた「成句」は、「(三年) 鳴かず飛ばず」というもので、使うときも、否定的な意味合いで使うことが多いようです。

プロ野球のドラフト会議で、一位指名の選手が、その後期待されたような活躍が出来ず、忘れられていった時などに、「あの選手は鳴り物入りで入団したのに、その後はさっぱり鳴かず飛ばずだね」などと使うことが多いですね。

「一鳴驚人」の背景にあるお話からは、ダメと思われた人間が急に人を驚かすような変化を遂げると言う希望が感じられますが、日本の「鳴かず飛ばず」は、其の儘ダメになってしまうと言う、マイナスのイメージがあります。このお話に関する限り、中国人のおおらかさ、懐の深さを感じます。

以前から感じていることですが、日本では、一度マイナスのレッテルが貼られると、それを振り払うのは大変です。皆さん、ご記憶にあるでしょうか。随分前のことですが、某県の警察本部長が着任して間もなく、交番の巡査が不祥事を起こし、それをもみ消そうとした巡査の上役達が摘発され、本部長も責任を追及されました。

ここで問題なのは、不祥事をもみ消そうとした人たちの意識が、着任早々の本部長の経歴に傷がつかないように配慮したことです。

何千人、何万人という警察官の中の一人が不祥事を起こしたと言って、直接の上司ならいざ知らず、着任早々の県警本部長の経歴に傷がつくと考えるのはおかしいですね。‘不祥事をどのように処理したか’、‘以後同様の不祥事が再発しないようにどのような策を打ち出したか’こそがリーダーに問われる資質であり、そのような経験こそがリーダーを成長させるチャンスだと思おうのですが、マイナスに敏感な日本の社会では、どんな不祥事も無かったことにするのが一番と考えるのでしょうか。日本では、三年鳴かなかった鳥には、もう鳴くチャンスはないようです。



Fù wèi zǐ yīn, zǐ wèi fù yīn
父 為 子 隱, 子 為 父 隱

父は子の為に隠し、子は父の為に隠す

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



人は正直でなければ生きていけない。これは孔子の持論です。でも正直なだけではとても生き辛い。これも孔子の持論でした。そこで必要となるのは「学ぶ」という行為です。「直を好んで学を好まざれば、其の蔽や絞す」〈陽貨第十七〉と孔子は言っています。「絞」とは窮屈になるということです。あるいは、人を苦しめる、という解釈もあります。

あるとき葉公（楚国、葉の地の長官）が孔子に次のように語りかけました。

「吾党有直躬者。其父攘羊。而子证之（Wú dǎng yǒu zhí gōng zhě。Qí fù ráng yáng。Ér zǐ zhèng zhī）（吾党に直躬なる者あり。其の父羊を攘む。而して子之を証す）〈子路第十三〉。私の村に、直躬という者がおります。父親が羊を盗み、その者がこれを証言しました、と。ここで言う「党」とは行政区分を表わす言葉で、500戸の集落を指します。直躬とは、ある正直者のニックネームと思われます。正直者の躬さん、と言ったところでしょうか。「攘」とは紛れ込んできたものを占有することです。

ところで、孔子の生きた時代には、法という概念はありませんでした。法家の思想が起こるのは、ずっと後のことです。当時は、罪を犯した者があれば、権力を握る者がその権力の及ぶ範囲で、自分の裁量で刑罰を行っていました。そして、その刑罰が「礼」という社会基準にかなっているかどうか、それによって権力者の人間性と統治能力が問われる時代でした。「礼樂興らざれば則ち刑罰中らず」〈子路第十三〉と、孔子も言っています。

さて、話は葉公に戻りますが、葉公が言いたかったのは、自分の管轄する地域では、親が罪を犯せば、実の子であってもこれを証言する、そういう公平な統治が行われている、ということです。恐らく架

空の事件を持ち出して自分の統治能力を自慢しなかったのでしょう。

これに対して孔子は次のように反論しています。

「吾党之直者，异于是。父为子隐、子为父隐。直在其中（Wú dǎng zhī zhí zhě, yì yú shì。Fù wèi zǐ yīn, zǐ wèi fù yīn。Zhí zài qí zhōng）」（吾党の直なる者は是に異なり。父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直は其の中に在り）。私の村の正直者はそれとは違います。父親は子の為に隠し、子は父親の為に隠します。正直とはそういうものです、と。

孔子が考えた社会秩序の根幹は家族関係にありました。その中核を成すものは父子関係でした。母子関係もこれに準じます。それは情愛と理性が、生まれると同時に交錯する原点でもありました。この点に関して正直であること、天下の秩序はここから始まります。それを保証するのが「礼」でした。したがって刑罰に於いても親子が互いに相手を庇い合うのは正直であり且つ「礼」にかなった行為、ということになります。この「礼」は「学ぶ」ことによっではじめて身に付くものです。

ところで日本の現行刑法105条には、親族による犯罪に関する特例というのが設けられていて、「犯人又は逃走した者の親族がこれらの者の利益のために犯したときは、その刑を免除することができる」とあります。つまり親族同士が犯行を庇いあった場合は、罪にはなっても刑は免れる、ということです。ここにも長年にわたって重んじられてきた孔子の教えの痕跡を見ることができます。

ちなみに中国の現行刑法にはこういった条項は見当たりません。

（わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師）

前号(6月号)で昨年8月24日から9月2日の10日間について8回に及ぶ『大連・長春・丹東の旅』旅行記はようやく終わったが、今年も5月10日から15日まで第3の故郷と思っている大連に行き、鞍山、本溪にも足を伸ばした。その旅行記を改めて書き始めたい。題して『大連・鞍山・本溪の旅(本稿はその1)』である。

今年は5泊6日の短い旅であったが、ちょうどアカシアの花が満開の時期に当たり、その微かに匂う香りの中で毎日変化に富んだ日々を送った。この時期の大連は1年で一番気候が良くそして美しさが溢れる時である。白い柳絮りゅうじよが飛び始め、赤やピンクのサクランボがこれでもかというくらいにあちこちで山積みで売られている。今回は往復とも中国南方航空のチケットなので、出発時刻は午後1時25分のため朝はゆったりと出掛けられてよかったが、帰りの15日は現地時間の朝8時20分のため実質4日あまりの旅となった。やはり行く日は朝4時起きでもANAの方が現地での行動には時間が取れて都合がいい。(ANA=成田出発10時10分、大連出発現地時間13時10分) こうしたことを書くのは、無理とは思いますが何とか週1便か2便でも羽田発の便を飛ばしてもらいたいからである。

さて5月10日、大連周水子空港には定刻より10分遅れの現地時間午後3時45分に着陸した。前の旅行記にも書いたが、来年は渤海に面した金州湾内の一部を埋め立てし、建設している、2018年開港予定の「大連金州湾国際空港(仮称)」に着陸するかもしれない。とすれば長年旅愁を感じてきた周水子空港の見納めかもしれない。「周水子」空港と書いてふと思い出したが、大連周辺には「〇〇子」という名の街がなぜか多いのである。列挙すると、本シリーズの何回目かに登場する予定の漢墓(漢=BC206年~AD220年)の史跡がある「営城子」、区の名前にもなった「甘井子」、さらに戦前の在住日本人が音読みで(カカカシ)と呼んでいた美しい海水浴場のある「夏家河子」、また「長嶺子」、「沙崗子」等である。

その多くは、旅順が終点の鉄道路線(旅順線)の駅名にもなっている。

「周水子」は、明治末から大正の初めころ発行された書籍「南満州鉄道案内」によれば当時は「臭水子」と言われており、旅順支線と瀋大線の分岐点の位置を占め主要駅となっている。周水子駅は日露戦争が終わって2年後の1907年(明治40年)開業で、開業当初の駅名はやはり「臭水子駅」である。中国人の友人に聞くと「周水子」は、「臭水子」という町と「周家屯」という町が合併して新たに今の地名になったそうだ。このころは日露戦争後日本が統治していたが、字面がよくないので日本語では同じ発音であったからこの字に変えたのかと思ったりしたがそうではなかった。空港名もこの町の名前から付けられたものだ。「大連臭水子空港」ではちょっと具合が悪いが周水子にしてよかったではないか。

空港には、中国人の友人とその娘夫婦がマイカーで迎えに来てくれる事になっている。税関を無事通過し、なかなか出てこない荷物をようやく受け取り



戦前の遼東半島先端地図。

大阪朝日新聞・満州版(1936年)より



友人たちと「品海楼」で

出口に向かうと、彼らが大きく手を振って出迎えてくれた。この瞬間はとても嬉しいものである。この時、陽もだいぶ西に傾いてきた。空港から市内中心部までは、地下鉄2号線で4元払えば簡単に行けるのでわざわざ迎えは必要ないのであるが、今回の旅の用件の一つは彼らに頼まれたベビー用品を運ぶ役目があった。

彼らには8月初旬に子供が生まれる。9月号で触れられれば触れたい。依頼された用品の内容は、粉ミルクは言うに及ばず、数種類の哺乳瓶、数種類の吸い口、瓶洗浄用のブラシ、洗剤などである。

これらの品物は、ベビー用品専門の「西松屋」で購入したのであるが粉ミルクは0～1歳と、1～3歳に分かれており、吸い口も同様に分かれている。きめ細かく分かれているとは少しも知らなかった。考えてみれば生まれたばかりの赤ちゃんに大きめの吸い口で飲ませると嘔せてしまうであろう。目から鱗の思いであった。

私からはベビー服をプレゼントした。ベビー服は中国ではかなり高いとかでえらく感謝された。賞味期限を確認しながら買った粉ミルク3缶のおかげで私の旅行鞆はかなりのスペースを奪われてしまった。初めての子供であり、大切に育てたいのは分かるが自国の商品はあまり信用していないようであった。そういえば大連で勤務していた時も何度か粉ミルクを頼まれた記憶がある。小包で送ればよいように思うが、今は粉ミルクについて、中国は自国の産

業保護の為に郵送はできないようだ。先日もある会でこの話が出ていた。

駐車場に置いてあるBMWに乗り込み、大連での定宿である「大連中山大酒店」に向かい、そこで頼まれたものを渡して大変喜ばれたのは言うまでもない。1階のフロントで元に換金し押金(保証金)を払ったが、1万円が586元しかない。昨年8月に行った時は、643元であったので少し損をした気持ちになった。部屋は日本人優先階の26階であった。

夕方になったので娘さんの友人も加わり、5人で「品海楼」に行きご馳走になった。品海楼は、大連市内にはいくつもある有名な海鮮レストランである。例によって食べきれないほど注文し、「食べる、食べる」と勧められた。食べ残しは「打包」するよう店員に言って持ち帰っていた。腹いっぱい食べ、13日に「營城子」に行く段取りを確認し、ホテルに送ってもらった。明日11日は大連北駅から高鉄に乗って日本人には比較的なじみがある鞍山に行くが、朝が早いのでシャワーを浴びて早めに横になった。(続く)

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしくお願ひします。また、新入会をいつでも歓迎します。途中入会の方には会費の割引があります。お問い合わせください。
年会費:1500円 入会金なし
郵便局振替口座:0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流によって国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ:042-734-5100 (事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

➤ 追悼会などは無用

由比忠之進は焼身自殺をする前夜、遺書を書いていました。「米国の沖縄小笠原占領とベトナム侵略に抗議して焼身自殺をする決心をした」という内容です。そして死後のことも次のように書き残しています。

簡条書きにしてその内容を要約するとこのようなものでした。

- 1) 自分は無神論者であり、死後の生命を全然信じないので葬儀は必要ないが、世間体があるからやっても良いがごく簡単にやること。
- 2) 香典などで集まった金は全部ベトナムの戦争犠牲者救済に使うこと。北及び南ベトナム両方に等分して。
- 3) 死後の霊を信じないから追悼会など全く無用。

そのような遺書でしたが、いろいろな場所で追悼集會が開かれました。それだけ由比の死を賭した行動は各界に衝撃を与え、また人々はその死を理解し痛みを分かち合いました。沖縄県祖国復帰協議会の会長、喜屋武真栄は「由比さんのやった気持ちは96万沖縄県民の全体的心情である」と語りました。

➤ 由比の死を各界の人々が悼む

社会評論家として、また毒舌家として有名で大きな影響力を持ち、当時でも「マスコミ界の帝王」とも言われた大宅壮一は、サンデー毎日で「首相訪米前日にこのような事件がおきたことは、日本はもとより、アメリカにとってもショックだろう。アメリカや日本にも、焼身自殺という抗議の形式が出てきたことは、人類全体の政治の中で、民主主義が行き詰まっていることを示している」と記し、「これは歴史的な重大な事件であって、一老人の“死の抗議”として軽く扱うべきものではない」と書きました。

由比と40年余に亘る友人の伊東三郎は、追悼集

会の案内文にこう書きました。

「私どもの友人、由比忠之進君は去る11月11日に首相官邸前において抗議の焼身自殺を、おこないました。このような行為にたいしては、いろいろなご意見もあろうかと存じますが、われわれは襟を正してこの厳しい事実をみつめたいと思います。つた

えられた抗議書、遺書にもありますように、由比君の行為は多くの国民の意思を代表し、憂国の至情にあふれ、やむにやまれぬものであったと思います。ここに由比君の霊を慰め、内外のうごきにたいして、私どもの気持ちを新たにするために、追悼集會を催すことになりました」

➤ エスペラントの仲間が追悼会

伊東の仲間であった熊木秀夫は、由比の長男である意出男を訪ねて追悼集會を説明しました。これに対して意出男は、「親は自分のやりたいことしたのだから満足しているでしょう。社会一般にたいする家族の迷惑も考えずに……。しかし、エスペランチストの方たちの心遣い、全国から寄せられた見知らぬ人たちの手紙や親父の遺書などを読んで、あらためて、一人の人間として見直しています。数日前も知らぬ方から香典が送られてきました。そのなかに千円が入っていました。百円はその人の子供が話を聞き、感激して送ってくれたものでした。いやがらせの手紙もいくつか来ましたが、好意を寄せてくれた手紙が圧倒的に多かった。追悼集會については、他からも申し入れが

ありましたが、エスペランチストの方でやるのでしたら異議を申しません。ただ、家族としてはそれを見守るだけです…」と語ったという。

➤ ベトナム人民を物心両面で支援

追悼集會は12月11日、東京三宅坂の社会文化会館ホールで行われました。由比が焼身自殺した現場からほど遠くない場所でした。会場の装飾は人形劇

第十五回 由比忠之進の残したものは……

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓（おもしろいよしひろ）

団ブークが担当し、各団体からの献花は団体名は取り除きました。祭壇中央に由比の遺影、その右にはエスペラントの旗、緑星旗が立てられました。左にはエスペラントで「Per Esperanto Por Paco」(エスペラントで、世界平和のために!)と大書きされた文字が浮かび上がっていました。

この言葉は、1953年9月4日から3日間、オーストリアのザンクト・ベルテンで開催されたエスペランティストの会議で提唱されたものでした。

発起人を代表して三宅史平は、「由比さんの死は、わたくしたちがばくぜんと考えていた平和について、もっとはっきりと自覚させてくれました。(中略)由比さんの死はその瞬間から由比個人から離れて社会一般の問題となりました」と挨拶しました。

伊東三郎が続いて、「由比忠之進の人となり」を15分間にわたって紹介しました。誠実、温厚な人柄、エスペラントの精神を純粋に理解し、その運動に情熱を燃やしていたこと、ベトナム戦争に心を痛み、物心両面でベトナム人民を支援していたことを参列者に紹介し感銘を与えました。

➤「由比の思想は生きている」

また日本平和委員会の平野義太郎会長、宗教者平和会議の壬生照順、3月に東京で開催された「ベトナム人民と連帯しアリス・ハーズ夫人を記念する会」で初めて由比に出会った柴田進午(法政大学教授)らの追悼の言葉が続きました。

柴田は「由比忠之進さん!」と呼びかけた後、次のように遺影に語りかけました。「私はあなたが、佐藤首相のベトナム侵略への加担、沖縄政策に対して焼身抗議を決行されたこと。しかも、あなたが二年前デトロイトで焼身抗議を遂げたアメリカの老婦人アリス・ハーズ夫人に共感されていたことを知って、大きなショックを受けたものであります」。

その他に、朝日新聞記者でエスペラティストであり、『戦場の村』を書いた本多勝一(代読・岩垂弘)が追悼の言葉を述べました。この『戦場の村』をエスペラントに訳したのが由比だったのです。

最後に英文学者で評論家中野好夫が「由比さん

の死は、言葉で言い表せるものをはるかに超えたところに意味がある。あの馬鹿騒ぎの“国葬”に比べ(元総理大臣吉田茂の国葬のこと)、本日の会合はあまりにも参加者が少ない。しかし“国葬”は歴史のなかで笑われ、由比さんの残した一粒の麦はきっと見直される時が来る。由比さんは無神論者で魂が生き残ることは信じなかったが、その思想は生きている」と語りかけました。

南ベトナム平和委員会のテイッチ・テイエン・ハオ師、世界エスペラント協会会長のイヴォ・ラペーナからの弔辞が読まれました。そしてエスペランティストの学生や青年たち約60人たちが舞台上上がり、エスペラントの歌「ラ・エスペーロ」が歌われました。

➤焼身自殺という行為

柴田進午が初めて由比と会う奇縁となったアリス・ハーズという婦人は、アメリカのベトナム戦争に抗議して焼身自殺をしました。アリスはドイツからアメリカに移住したユダヤ系のクエーカー教徒です。それに続いてノーマン・モリソンら8人が焼身自殺で抗議しています。このノーマン・モリソンもクエーカー教徒でした。

クエーカーはキリスト教の一派ですが、その平和主義は徹底的で、その多くは良心的兵役拒否者でもありました。現在の天皇が皇太子時代の家庭教師であったエリザベス・バイニング夫人はクエーカー教徒でした。バイニング夫人の影響をより受けたのは皇太子より弟の常陸宮だったとか。そんな話を聞いて週刊誌記者だった私は取材で1970年代の初め、当時、港区・魚籃坂にあったクエーカー教徒の集会所を訪ね、その後も指導的な立場にあった人と親しくお付き合いすることもありました。

由比さんは自分を無神論者と言っていますが、クエーカー教徒と同じように平和への思いは強かったのでしょうか。由比さんの死から今年ちょうど50年、由比さんの平和への思いを改めて胸に刻みたいと思います。

東西文明の比較 (15)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

卑弥呼の時代は、弥生時代の後期から古墳時代への過渡期と考えられます。そして、弥生時代は、戦乱の時代であったといわれます。縄文時代の弓矢は獣を捕る道具でしたが、弥生時代になるとそれらは人を殺傷する道具に化しました。吉野ヶ里遺跡をみると、見張り台・のろし台や防御のための環濠などが戦いに備えていたことが分ります。のどかであった縄文の日本が、弥生時代になってなぜ「戦乱」を招いてしまったのでしょうか。

一般的には、「農耕社会の誕生、つまり水田耕作を主たる生業になった結果、「土地や灌漑

用水の確保」が争いの原因になった」「余剰食糧が貧富の格差を起こした」ことに拠るともいわれています。どちらも正しいと考えられますが、実はもうひとつの原因があったという説があります。後漢書の「東夷伝」の記述に注目します。

「安帝永初年(107年)倭国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願う」とあります。この文中にある「生口」とは、戦いにおける「捕虜」のことです。広義では「奴隷」と解釈します。

卑弥呼は、239年、243年に「男の生口四人、女の生口六人」を魏の皇帝に献じ、さらに卑弥呼の宗女(跡継ぎ)の台与も「男女の生口三十人」を献じています。ちなみに他の東アジア諸国から「生口」を献じた例は、4～5世紀からです。倭による「生口」の献上は特出しています。

「生口」は捕虜で、牛馬なみの奴隷でした。倭が早くから朝貢品としたのは、他国に比べて特産品がほとんどなかったことが原因と考えられます。「生口」を獲得するために、争いを起こしたとは考えたくありませんが、穏やかな縄文時代とは異なる日本の姿が見られます。

次にこの時代の「大陸」を見てみましょう。

中国周辺民族の台頭と高句麗の勃興

3世紀後半から4世紀にかけて、中国は「五胡十六国」になります。華北には周辺の異民族が大量に移住してきました。西からは西戎、北からは北狄が侵入しました。晋書に「陝西の関中の人口百余万、そのうち半ばを占めるのは戎狄なり」とあります。

朝鮮半島では、高句麗が誕生しました。楽浪郡と帯方郡を開放して、朝鮮半島から中国を追い払いました。高句麗の北方に夫餘というクニがありましたが鮮卑族に追われていました。高句麗は、この夫餘の人々を受け入れ、建国の中核に据えました。高句麗は上記のように建国の過程で鮮卑族との摩擦を招きましたが、その際は楽浪郡と帯方郡の中国系移流民の力を借りて生き延びたのです。

やがて4世紀後半には馬韓から百済が、辰韓から新羅が誕生しました。百済の生誕地は楽浪郡と帯方郡と接する伯濟国の漢城で、やはり建国には両郡の中国系の人々が発展に貢献したようです。新羅は、辰韓諸国の雄、斯盧(しろ)が周辺諸国を統合して誕生しました。377年には五胡十六国のひとつである前秦へ、高句麗の先導で朝貢したといわれています。以来、高句麗と新羅は行動を共にします。それに対抗して百済は、倭と同盟関係を築きます。なお、この時代の朝鮮半島には、先に挙げた3国のほか、任那・加羅・秦韓・慕韓の7カ国がありました。

広開土王碑文について

高句麗の広開土王の墓が鴨緑江西岸(中国吉林省集安県)にあります。そこに6メートルを超える巨大な石碑があります。碑文は、1775文字。その一部を次に記してみます。

「百残(百済)・新羅、旧より是れ属民にして、由来、朝貢せり。而るに倭、辛卯の年(391年)より以来、□を渡りて百残を破り、新羅を□□し、以て臣民を為せり。以て永樂六年の丙申(396年)、王、躬ら□軍を率い、残国を討伐す」とあります。この碑文によって、倭と朝鮮半島の関係がわかります。(□の所は、破損により「文字」が読めない部分です)。

倭の五王が東晋へ遣使

倭の五王とは誰でしょうか。「讚・珍・濟・興・武」の

消え去りゆく北京の路地裏・胡同への思い (2)

木村 武司

6月号では「消え去る胡同」について書きました。

7月号では胡同撮影のきっかけや胡同の良さと素晴らしさを述べてみたいと思います。

私が初めて北京を訪問したのは1984年秋9月でした。

ある日、中国・北京観光の一つである万里の長城に行く時に、偶然にも車窓から見えた光景から胡同の撮影をしたいと思うようになりました。その時はまだ胡同という言葉さえも知りませんでした。それは一人の老人が家の前で小さな木製の椅子に座ってタバコを吹かしながら通りの人や車の行き来を静かに見ている、北京の生活感がにじみ出た一瞬の光景でした。私はすぐさま周辺の目標物を探しました。すると反対側に北京駅が見え、「よし！ 時間のある時にまたここに来よう」と思いました。

北京の観光名所を巡り、北京の歴史の深さに感銘を受けましたが、やはり観光的に修復された場所であり、また誰もが撮影し、撮影出来る場所ですので、その美しさに夢中でシャッターを切るという感動はありませんでした。それよりも車窓から見た一瞬の老人の姿が、私にはどうしても忘れられませんでした。

数日後、空いている時間を利用して、泊まっている北京の「京倫飯店」から地図を持って北京駅が見える交差点を目指して初めて路線バスに乗りました。車掌さんに地図を指さし、声を掛けてもらって目的地のバス停で降り、車窓から見た場所に足を進めました。勿論、この前見た道筋に老人の姿はありませんでした。大体の場所は脳裏にありましたので記憶を頼りに、その家の近くまで行きました。巡り会いというのは不思議なものです。この家ではなかったかとうろついていますと、中からその老人が偶然にも出て

来ました。

めちゃくちゃな中国語ながら話し掛けると、そこは大人同士、写真を撮りたいという私の強い気持ちが通じたのでしょう。老人は快く撮影に応じてくれました。銭さんという方でした。夢中で撮影しました。今度また北京に来た時写真を持って来ると約束してお別れしました。



(1984年9月)



(1975年7月)

せっかくここまで来たのだからもう少し撮影しようと車が行き交う大通りから細い路地に入りました。急に街中の騒音が消えました。静かな落ち着いた北京の人々が住む胡同に足を踏み入れたのです。しばらく行くと街中とは別世界の光景が広がっていました。人々の住むレンガ造りの壁、そして所々にある木造の門の周辺が装飾された伝統的な入口の古い門…。まるで骨董品がずらりと陳列されているように見える不思議な世界へタイムスリップして滑り込んで来てしまった！ というようにも感じました。

これが私が初めて見た、初めての胡同体験です。春雨一巷。観光名所の建築物とは違って煌びやかに修復するなどの人の手が加わっていない風雪に耐えた門等の装飾品が、かえって歴史の永さ・深さを私に感じさせました。古い町並み、そこにある人々の生活感。この時の感動によって私の胡同撮影が始まりました。

翌年1985年6月末、私達夫婦は再び北京に行きました。その際に昨年約束した銭さんの為に自分で引き延ばした四つ切りの白黒写真を持って行きました。必ず持参して銭さんに手渡したい、そういう一心でした。空き時間を利用して、銭さんにお会いできる事を楽しみに、私は銭さんの家に向かいました。

約9か月ぶりの再会でした。まずは私のことを覚えていたくれたこと、私の写真を受け取って喜んで

くれたこと、今でも忘れません。中国の方は、本当に写真を大切にすることが多いと思います。銭さんは自分が写った写真を非常に喜んですぐさま私を家の中に招き入れてくれました。お茶をご馳走になり、今度は室内で撮影させて頂けないかとお願ひしました。彼は快く承諾してくれました。実は室内は外とは違ってビックリするほど明るさが異なる難しい撮影でした。そしてまた北京に遊びに来た時に今日撮影した写真を持って帰るからと約束して、銭さんとお別れしました。余談ですが今思い出すとその当時の中国はホテルでも薄暗い照明だったことを思い出します。帰国後、我が家の照明はまばゆいばかりの明るさに感じたものでした。

そして3回目の北京。1986年7月末に前回同様、銭さんの家の中で撮影した写真を持参して彼の家に向かいました。が、彼の家にたどり着く道路で私は衝撃を受けました。以前と違う！確かに1985年の時は彼の家の通りを挟んだ向かい側ではビルが建設中でした。その高層の建物は既に完成し、逆に彼が住んでいた道路側の町並みは何もない更地になっていたのです。この光景に一瞬は夢ではないかと疑いました。しかし夢ではなく現実であることを認めないわけにはゆきません。悲しかった。とても悲しかった。持参した写真を銭さんに渡せないという事と共に、北京らしい庶民的な風景があつという間に消去されたという事実にショックを受け、私はそこで暫く呆然と立ちすくんでいました。

その後、数回胡同を撮影に行き分かったことがありました。北京の住民の方々は、先祖代々北京に住み続け、そして北京に生まれ北京ですっと成長し生活し、北京の永い歴史の重みは理解していても、胡同の風景を惜しむ気持ちは外国人の私とは違うということなのです。私からすれば胡同の風景は、日本の歴史で言えば室町時代からの風景が現代に残る、いわば骨董品が並ぶ貴重な歴史的文化的文化財であっても、そこに住む彼らの気持ちは私と同じではないということなのです。この気持の違ひは撮影中のトラブルにもなりました。

オーバーな言い方も知れませんが、私は写真の画像はその時の歴史を残すことが出来ると思っています。ですから、スナップ写真ではなく三脚を用い胡同の風景をきちんと記録に残そうという気持ちで撮



忙しい家庭は、外で買い物をして朝食とします。「油条」です。(2003年11月)



客が並ぶほどでも無い商売。すぐに世間話が始まります。(2005年8月)



冬は野菜が少なくなる。そこで漬け物用白菜が飛びように売れる。(2008年11月)

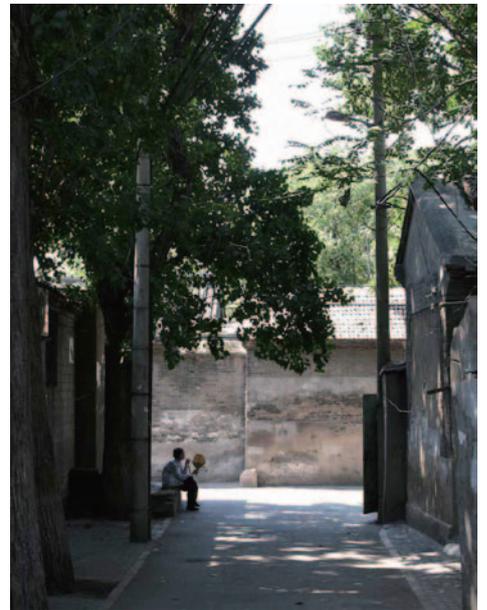


副食品店前。どんなお酒か飲んでみたい。(2003年11月)

影をしていました。或る時、ひとりの青年が私に声を掛けて来ました。彼にとって私の撮影姿が不思議に思えたのでしょう。「何を撮影しているのか?」と。「古い町並みが壊されてなくなる前に撮影しておかないと…」と説明をし始めました。が、彼の感覚は違っていました。「何でこんな汚い所を撮影しているのか」という彼にしばらく説明を続けましたが、胡同に対する感覚の違いがある中で、胡同の良さや失われてしまう危機感を話しても、残念ながら彼には分かって貰えませんでした。



裏通り (2003年11月)



涼む (2007年8月)

古い歴史あるものを彼は汚いと言う。こういう見方があったことに私はショックを受けました。考えてみれば、幼い頃から育ってきた町並みはいつも見慣れている風景だけに、‘文化的な価値’という別な視点で自分が生まれ育った町、永い歴史を持つ町を見る事はなかったのかも知れません。ですから現地の大多数の住民の方々は、家族写真や記念写真は大事にしても、自分たちが住んでいる歴史的な風景がいずれは消えていく事実に関心はなく、まして記録に残しておくという様な考えはないのかも知れません。興亡の激しい中国では多くの文化財が次の代で破壊されてきた歴史的経緯があり、歴史的な文化価値よりも新しいものの価値に重きを置いているように思えます。ならば自分が感動し、失われゆくこの風景は自分が写真で残して行こうと心を新たにしたのでした。

2000年代に入って、北京の人々の生活は良くなりました。若い人達はインターネットを使うようになり、「老北京」というインターネットの組織が出来、自分達の胡同を見直そうという活動が生まれました。肩身の狭い思いをしながら胡同を撮影していた私は、若い中国の皆さん達がカメラを持って胡同を撮影している姿を見ると仲間が増えたようで嬉しく感じています。今やっと中国の人々は自分の国の、歴史的に価値ある存在を見直し始めたように思います。

胡同には北京の庶民たちがここで暮らしてきた昔



午後の一時。日陰で住民同士のお付き合いがある。(2007年8月)



あら、負けちゃった。(2007年8月)

からの生活風景があり、その風景にほっとする自分がいます。マンション生活にはない人間味溢れる温かな風景が胡同にはあるように感じます。そしてそういう風景が今、北京の街からどんどん消え去っているのが残念に思われます。この地球上で、中国・北京にしかない貴重な風景なのですから。

黄土高原^{注1)}に咲く目にも彩なる花々 I
陝北延川県高鳳蓮・郭如林の剪紙・布堆画^{注2)}の研究
周路

20世紀も80年代になった頃から、一般に黄土高原と呼ばれる、陝西省延安市一帯で、大掛かりな民間美術全面調査が繰り広げられました。そして多くの民間芸術家(主として剪紙作家たち)が見出され、その中には、後に中国政府や国連組織ユネスコにより“民間工芸美術の名人”と命名された人々がいました。

延安北部安塞県では、曹佃香、高金愛、李秀芳、白鳳蘭、常振芳、藩常旺等が注目され、また延安市郊外では姫蘭英、延安南部富県では張林召、洛川県では王蘭畔、渭北高原旬邑地方では庫淑蘭と、いずれ劣らぬ剪紙名人たちが見出されました。

これら地域では民間剪紙芸術文化が古くから綿々と受け継がれており、貧しい暮らしの中で目を見張るような剪紙作品が作り続けられてきたのでした。この一連の調査によって発見された作家たちの作品が広く紹介されると、すぐに民間芸術研究者たちの目に留まり、関心を集めました。

1980年、中国美術館は、“陝西省延安地区における民間剪紙芸術展覧会”を開催し、北京の文芸界に一大センセーションを巻き起こしました。人々は「中国民間剪紙芸術がグレードアップした」と展示された作品を称えました。



剪紙を^き切る安塞の高金愛と高金愛の剪紙作品

1983年には、安塞県の農民画7枚が“フランス独立サロン”美術作品展で入選し、中国僻地の農民芸術家が世界で認められる切っ掛けとなりました。

1986年、当時北京中央美術学院で教鞭をとる美術教育家・靳之林氏の尽力により、教育とは無縁だった延安地区の6名の老婦人が北京の中国美術最高学府である中央美術学院へ招聘され、造形芸術を学ぶ学生達に彼女たちの創作活動を披露しました。老婦人たちが無造作に切り出す剪紙の作品は、美術の専門的訓練を受けた大学生たちを驚かせ、「竈の灰に塗られた村の芸術家たちが、中国最高の芸術の殿堂を驚愕させた」と中国中の話題となりました。

この時北京へやって来たのは、安塞県から曹佃祥・高金愛(写真上掲)・胡鳳蓮・白鳳蘭の4人、洛川県から王蘭畔、甘肅省平涼県から鄭秀梅の計6名で、



陝西省安塞県の伝統的剪紙・農耕図



陝北六位婆姨和靳之林 1986 年在北京合影 (1986)
靳之林 (北京中央美術学院・教授) と 6 名の陝北老婦人たち

彼女たちは又、ユネスコが指名した「民間工芸美術の名人」第一陣でもありました。この 6 人は、陝西省北部 (以下、陝北) の民間芸術先駆者として活躍しましたが、2011 年 4 月、高金愛が亡くなって、皆故人となりました。

先の調査で見出された民間芸術家たちの住まいを地図の上に印してみると、安塞・延安・甘泉・富県・洛川と、黄土高原の真ん中を北から南へ、一直線で並んでいます。この地方は、北部からは遊牧文化、南部からは漢文化の影響を受けて、剪紙芸術がごく自然に、住居の窓飾りとして生活の中に溶け込んでおり、一方春節に家の門に貼る門神の年画とも影響を与えています。

門神には家庭や地域から災厄を取り除き安寧をもたらすよう祈り、窓飾りの剪紙には来る年の五穀豊穡・暮らしの平安を祈る護符として、それぞれの役目が与えられて来ました。剪紙は、黄土高原地帯で広く伝承され、愛されていますが、その役割、剪紙に込める人々の想いは地域によって違いがみられます。



延安地区行政地図

延安の東 80km に位置する延川地区は、68km 東に黄河が流れており、対岸の山西省 (永和・石楼などの町) との行き来のある地域です。その為 20 世紀 80 年代中頃には、延川県を含む黄河流域では、人々は既に窑洞^{ヤオトン注3}を石で補強した石造りの窑洞に住むようになり、以前よりかなり安全性のある生活が送れるようになりました。この地域では、剪紙は明り取りの窓に貼られて、窑洞の装飾としての役割も担っています。

これに対して、先に剪紙の名人を多く輩出した、黄河からは遠い延安周辺で中軸線上にある安塞付近の村民の殆どは、依然として、山の斜面に直接横穴を掘って作る、昔ながらの窑洞を住居としていました。この窑洞は、陝北の伝統的な住居

であり、古代の穴居生活の習俗を残したもので、なかなか快適な住まいですが、長い間には風雨に曝されて崩れ落ちやすくなるなどの問題がありました。そのような事情で、旧来の窑洞に住む人びとは、一生の間に 2 回、3 回と窑洞を掘り直すこともあり、資産を蓄えることには無縁の生活でした。一生を平穩に暮らすことが彼らの最大の

願望であり、それを祈る方法こそ、祖先から手に、心にと伝えられてきた剪紙——窓飾りでした。この地域に住む人々にとっての剪紙の窓飾りは、精霊への祈りであり、魔除け札であり、吉祥へのあらん限りの願望なのです。

剪紙に込める想いは、地域によって、又個々の人によって様々ですが、この民間芸術を掘り起こそうという波は延安地区・安塞地区から延川地区にまで及んで来ました。

20世紀80年代の中・後期になって、延川県文化館、延川県政府文物部門が、民間剪紙の全面的調査を実施しました。王芝蘭・劉桂蘭・高鳳蓮など何人かの年配の剪紙名人が探し出され、同時に袁随花・高秀芳・劉曉娟など若い年齢層の既婚女性も見出されました。更に数万点にも及ぶ民族的・芸術的に価値のある剪紙作品が掘り出されました。

また、山西省各地で油絵を描きながらの放浪生活に休止符を打って、黄河河畔の故郷に帰り、先祖伝来の棗の木の世話をしていた郭如林は、既に中年を過ぎていましたが、この頃から剪紙を手掛けるようになり、しかも彼の剪紙技術も名人として認められたのでした。

延川地域で見出された人々の中では、高鳳蓮と郭如林の作品が抜きん出ていましたが、その後、僅か20年の間に、延安地区・陝北地区のみならず全中国の注目

を集める剪紙芸術名人として、自分の作品で家族を養い、家業を支え、併せて数々の中国国家芸術大賞を獲得し、中国美術館で剪紙作品の個展を開催し、CCTVのスタジオで剪紙の実演をし、外国へも度重ねて出かけて中華剪紙芸術の素晴らしさをPRするようになると誰が予想したでしょうか。

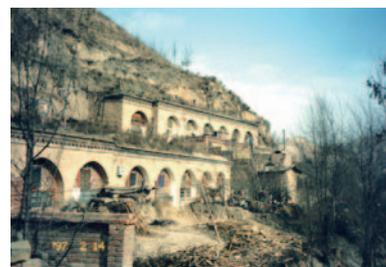
(訳文：有為楠君代)



延川県を囲むように流れる黄河

■注

- 1) 黄土高原(こうどうげん huángtǔ gāoyuán)：中華人民共和国を流れる黄河の上流および中流域に広がるおよそ400,000～640,000km²の広さの高原。ゴビ砂漠などの細かな黄砂が300万年近くに亘って堆積したと言われる。
- 2) 布堆画(bù duī huà) アップリケのこと。
- 3) 窑洞(ヤオトン yáodòng) 中国・黄土高原地帯の横穴式一般的住居。崖に横穴を掘り住居としたもの。ヤオトンは真南に向かって掘られていることが多く、冬は暖かく、夏は涼しく、遮音性もあり予想以上に居住性が良い。



窑洞の住居、安塞県にて(1997)

撮影：田井光枝

■周路略歴

1956年、中国安徽省合肥市で生まれる

1980年、安徽皖西学院美術系卒業。中学教師、大学教授、安徽省民衆芸術館学芸員を歴任／1992～94年 版画研究の為日本留／2001～03年、陝北黄土高原延川県文化局副局长を務める傍ら現地の民間芸術を調査／1985年以来、40回を超えて陝北黄土高原に赴き、黄土高原をテーマにした木版画作品を100点以上創作、国レベルでの展覧会で、銀賞1回、銅賞3回、優秀賞など複数回受賞、又、省レベル開催の展覧会での受賞多数回／作品は《中国現代美術全集・版画の部》、《中国優版画家作品選》、《二十世紀中国百年版画展》等の画集他、多数の雑誌に掲載。

■作品収蔵美術館：中国美術館、广州美術館、深圳美術館、青島美術館、四川神州版画美術館、日本千葉県立美術館、広島王舎城美術館／1999年、中国版画家協会による“魯迅版画賞”を受賞／2001年、延安市文聯によって“徳術双馨芸術家”の称号を授与／2003年 延川県政府によって“延川県名誉市民”の称号を授与／2010年“安徽省第二回学術・技術者”称号を授与／安徽財經大學文学・芸術学院教授、修士課程指導教官／陝北黄土高原の民間芸術関連著書、及び、写真集などの出版多数あり

今回は漢字の創作法シリーズの最終回でした。拗おウ体たいという、近体詩の作法に合わない詩の代表作として、猛浩然の『春暁』(春暁)と王維の『送元二使安西』(元二の安西に使いするを送る)という二首を学びました。

拗体とはねじれたスタイル、つまり型破りな詩を指します。では、逆に何時から型通りの作詩が重要になったかということ、科挙の試験項目に作詩が取り入れられてからだそうです。試験の採点をするために、どんなに素晴らしい詩でも、型にはまってなければ×にして、ふるい落としたりらしいです。

そういう訳で、以降の詩人が怖くて型破りな詩を書かなくなったとか。型破りでも、『春暁』のように味わい深い詩もあるのに、試験という制度に縛られて、型から出られなくなったのは、何だか残念な気がします。ですが、その前の初唐や盛唐時代にはしばしば近体詩の法則からは外れていても、読んでみると素晴らしい詩も沢山あったそうです。一方、厳しい作詩法があったからこそ、漢詩は時代を超え、地域を超え、東アジアの共通文化として定着したとも言えます。

さて、猛浩然の『春暁』といえば、日本人でも知らない人はいませんね。東京都町田市の公立小学校では小学五年生の国語の教科書に唯一載っている漢詩が『春暁』です。中国では物心ついた頃から暗唱している漢詩の中で、最も有名な詩と言えるでしょう。特に第一句の「春眠暁を覚えず」は日本人と中国人をつなぐ合言葉にしてもいいくらい誰もが知っています。私自身にとっても暗唱はモチロン、30年愛唱してきた愛着ある詩です。いつも、頭の中には朝霧に包まれた古いあずま屋と庭一面に散った花びらと、眠そうにベッドに横たわる作者の臃げな絵が浮かびます。

さて、最後の一句、「花落つること知んぬ多少ぞ」ですが、二つの解釈があります。一つは「昨夜の雨でどれだけ花が散ったことだろう」もう一つは「昨夜の雨できっと多くの花が散ったことだろう」という解

釈。一つ目が疑問なら、二つ目が推測、でしょうか。

これは、「多少」という言葉をどう理解するか、で違います。「多少」は中国語では「どのくらい」という意味の疑問詞ですが、多いか少ないかでいうと「多い」というニュアンスがあります。一方、日本語では、「多少のことならいいでしょう」と言うように、どちらかと言うと「少ない」というニュアンスになること。「多」と「少」で意味の重点が日中で違うということは、ある意味、新鮮でした。

その後で、庭一面に散った花は一体何の花か、という話で一同盛り上がりました。私は桃のようなピンクの花びらをイメージしていたのですが、椿ではないか、という意見もありました。

「ツバキはこの詩のイメージとしては正にピッタリですね。ただ、ツバキは今でこそ中国各地で見られる名花の一つですが、唐代では浙江省の会稽あたりにしかなかったそうです。したがって孟浩然がツバキを知っていたとは考えにくい。ちなみに中国ではツバキのことを「茶花」(cháhuā) と言って、山茶さざん花と区別しません」

「椿」は別の植物を指すのだそうです。

作者の猛浩然は、『三国志』や『十八史略』の舞台にもなっている河南省襄陽の生まれ、大変義侠心に富んだ人物で、李白とともに仙人を目指したこともあり、隠遁生活をしてきました。689年生まれの猛浩然は、李白より12歳年上です。時は玄宗皇帝の時代でした。詩歌管弦等、芸術を大変重んじた玄宗皇帝に仕えようと人の紹介を頼り、何度もトライするのですが、肝心の時に引っ込んでしまう。そんなことを繰り返して、隠遁生活を続けます。最後は親友が都から訪ねて来てくれたのを喜んで、病み上がりにもかかわらず、お酒を飲みすぎて亡くなったと言われています。

さて、面白かったのが植田先生の猛浩然へのコメントです。

「ここ一番で引いてしまう意志薄弱なタイプ。オトコに多いですね。変にプライドがあると言うか。頭下

chūn xiǎo
春 晓

mèng hào rán
孟浩然

chūn mián bù jué xiǎo
春 眠 不 觉 晓

chù chù wén tí niǎo
处 处 闻 啼 鸟

yè lái fēng yǔ shēng
夜 来 风 雨 声

huā luò zhī duō shǎo
花 落 知 多 少

sòng yuán èr shǐ ān xī yáng guān qǔ
送元二使安西 (阳关曲)

wáng wéi
王 维

● ○ ○ ● ● ○ ○
渭 城 朝 雨 浥 轻 尘

● ● ○ ○ ● ● ○ ○
客 舍 青 青 柳 色 新

● ○ ● ● ○ ○ ● ●
劝 君 更 尽 一 杯 酒

○ 西 ● 出 ○ 阳 ○ 无 ● 人
xī chū yáng guān wú gù rén

げん じ あんせい つかい
元二の安西に使用するを送る

陽関曲 王維

いじょう ちょう う けい じん うるお
渭城の朝雨軽塵を浥す

かくしや せい せいりゅうしよくあらた
客舎青青柳色新なり

すす ます っ 一杯の酒
君に勧む更に尽くせ一杯の酒

にし のかた ようかん いづ こじん な
西のかた陽関を出れば故人無からん

げてぺこぺこしたくない。それでもって肝心なところで身を引いてしまい、後悔を繰り返しながらも、最後は自分の世界に安住する。同性としては非常に共感を感じます。そういうオトコが、1300年経っても人々に愛唱され続ける詩を残したんだから、こういう性格でも恥ずかしくないと思いますね。そういう目でこの詩を読むと何とも愛おしく感じるんですよ]

と。植田先生も、若い頃この詩を読んだ時には何処が良いのかわからなかったそうですが、今では愛おしくてたまらない。名作とはやはり、人生の深みとともに味わいを増す、不可思議な存在なのだと改めて思いました。

次の詩は猛浩然の親友だった王維の『送元二使安西(阳関曲)』でした。

陽関曲となっているのは、この詩が後世メロディーを付けて歌われていたからです。『唐詩選』には七言絶句として、『唐詩三百首』では「楽府」として納められています。

「この詩も《春晓》と同様、粘法・反法が近体詩の作法に合っていないのですが、この作品も別れの詩として非常に味わい深い。特に最後の一行「西のかた陽関を出れば故人なからん」は大変有名ですね。故人は日本語では亡くなった人のことを指しますが、中国語ではよく知っている人、つまり友人を指します。陽関にはノロシ台が今も残っていますが、ここから西の地は、漢民族がめったに足を踏み入れることのない異民族の土地なので昔は生きて帰れるかは分からなかったのです。その為、別れの日の前に一週間くらいかけて、毎夜酒を酌み交わしたそうです。

私もその昔、陽関の地を踏みましたが、ゴビ砂漠が広がるもの寂しい風景は、現代でもラクダや馬で旅をしたら、生きて帰れるのか、と思わずにいられない荒涼とした土地でした」

みんなで漢詩の朗読を堪能した後、植田先生自ら数字譜に起こされた譜面を配布され、南曲と呼ばれる5音音階と、北曲と呼ばれる7音音階の2種類の歌を歌っていただきました。5音音階はファとシがなく、ペンタトニックとも言われます。日本の民謡もこの部類が多いですね。7音音階はシルクロードを通じて中央アジアから伝わったと言われていています。メランコリックなマイナー調で、聞いた途端、西域の雰囲気があります。

植田先生は日本語の歌詞も付けてくださっていました。

夜明けの雨にさらされて
柳の緑が目にしみる
名残の酒をいま一度
さいはての地に行く君よ

因みに中国伝統音楽の楽譜では、楽器や音楽のジャンルごとにさまざまな記譜法が使われていたのですが、東洋諸国で広く使われた工尺譜(こうせきふ又はこうしゃくふ)というのがその一つで、「低いソ、低いラ、低いシ、ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ」にあたる音階を、それぞれ「合、四、一、上、尺、工、凡、六、五、乙」の漢字を用いて表記します。1オクターブ高い音は、漢字の左側に人偏を付けるそうです。

ついに漢詩の講座に楽譜や歌まで！新たに植田先生の扉が開いた奥深い講義でした。

キャンディから西の方へ30km、車で1時間半も走るとキャーガッラの町の郊外に出る。ピンナワラ・ゾウの孤児院は、大人気のスリランカ観光のメインスポットである。ゾウが練り歩く姿は、決して派手なショーとは云いかねるが、日本では見られない光景である。孤児院で育てられたゾウは、ゾウ使いかお寺にもらわれていく。東京多摩動物園や山口県周防市にある徳山動物園など、日本の動物園にプレゼントされたゾウもピンナワラ・ゾウの孤児院出身である。お寺にもらわれ飼われると、ペラヘラ祭で活躍することになる。因みに、タランガッレ・ソーマシリ師が住職を務めるサママハ・ヴィハラヤ(平和寺)にも、政府から1頭与えられた。仏教では、お釈迦さまの母上が懐妊された時、ゾウの夢をみたことから大切な動物とみなされてきた。内外の旅行者の注目度上昇中の「ピンナワラ・ライブ」は、癒しのステージである。

ゾウの孤児院

ピンナワラのゾウの孤児院に幾度となく訪れているうちに、ミルクタイムに出遭った。いつもご一緒して下さるソーマシリ師が「1日3回、バケツいっぱいミルクを大きな哺乳ビンで次、次と飲ませるのだよ。9歳から15歳の子どものゾウにね」と云われた。ゾウたちが一生懸命ビン口くちに吸いついている姿は感動的であった。

「午後2時から乳児以外のゾウが集って、水浴びがあるから観ていく?」「観たい!!」とのことで、おみやげ物屋に入って待つことにした。何気なく店に並べられたみやげ物を見ていたら「ゾウのうんち」ペーパーが売られていた。ゾウのうんちペーパーとは珍妙で捨て難

いおみやげである。お店で、ペーパーになるまでの行程を簡単に教えてもらった。葉っぱや草花、果実、野菜を主食とする草食のゾウは、大人になると1日120kgのうんちをするそうである。その大部分が繊維質であり、煮沸してそれを取り出し再生紙を混ぜてパルプにしたものを、水の中で漉すく。その後は、手作業で水分を絞り出し1枚ずつはがして乾かす。いろいろに加工して商品として完成させるのだそうだ。メモノートなどを買って求めたところで、店の外からなにやらざわめきが聞こえてきた。どっしり、どっしりとゾウ使いに率かれてゾウ達が歩いて来た。耳をぱたぱたさせて体温調節したり尻尾を振ったりしながら行進していく。レストランの下の川で水浴びが行われるので、私たちは後について行き、ゾウ達が水浴びする姿を楽しんだ。

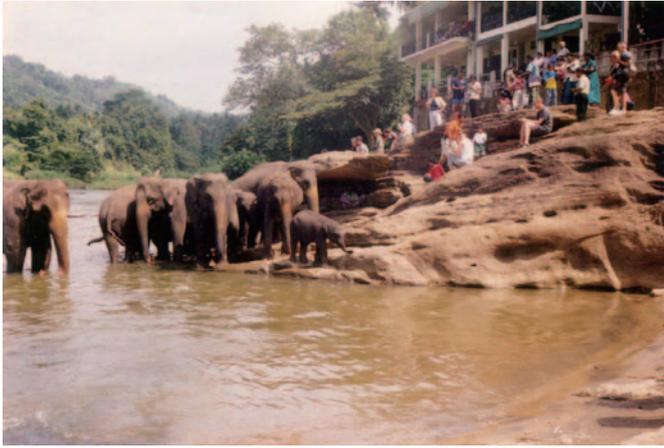
川の中で、ゾウは思い思いの水の浴び方と遊び方で、時には飼育係の方が振り廻される場面もみられた。沐浴風景は圧巻であった。アフリカでみたゾウよりも小さくて四角く見えた。

ゾウの近くに寄ってみると、浅いしわがあり固い毛が生えている。スリランカのゾウはおとなしい方だと聞いている。ピンナワラのゾウの孤児院では、ジャングルで親にはぐれてしまったり、子ゾウの時に失明したり、親と死別してしまったゾウを引き取っている。1975年2月に、5頭のゾウを受け入れたのを機縁として、野生ゾウを保護する目的で始められた。ゾウの研究と教育機関を兼ねる機能も担い、10人以上の獣医が待機している。

ソーマシリ師が「ゾウの睡眠は2～3時間。バナナやりんご、さとうきびや蜂蜜、それに塩も大好きだよ。人間と同じようにゾウだってストレスがたまる。その時は、尻尾と鼻を上げて怒る。優しくすればそれなりに懐なついてくる。たまに、ゾウ使いがゾウに蹴られたりするのは、日頃、鞭で打られたりいじわるされたことを覚えているからなんだ。ゾウはとても利巧だからね…」とゾウについて話して下さった。



ゾウの孤児院門(グーグル・パノラミオから)



ゾウの孤児院の様子(グーグル・パノラミオから)

ピンナワラ孤児院の広大な敷地に、現在、90頭程のゾウが生活している。急増するホテル建設、インフラ整備ラッシュ…内戦後の復興に沸いているスリランカ。ハンバントタ・エアポートにみる開発事業進行に拠って森林が伐採されるにつれてゾウが住む場所も狭められ、ゾウが人間社会に被害を与えるようになってきた。ここに来て自然に生きるゾウと近代化される人間社会とどのようにバランスを取って行くかというに難題が生じている。

サママハ・ヴィハラヤのペラヘラ祭

スリランカゾウは、仏教寺院の行事には毎回必ずといっていい程、大きな役割を果たしている。キャンディやコロomboの名だたるペラヘラ祭はさておいて、各地方でそれぞれ特色あるペラヘラ祭が催されてきている。私にとってのペラヘラ祭はサママハ・ヴィハラヤ(平和寺)のものである。

この寺の住職であるソーマシリ師は5月開催の祭前の期間は、この祭の指揮を執るので、連日大忙しの日々である。この重要な祭をより盛大にするためには莫大な費用がかかるのだ。祭への寄進を住職自ら募^つって歩かねばならない。ゾウをトラックに乗せて運ぶ丈でも距離によっては日本円で1頭3万円也になると云う。

1964年から始まるサママハ・ヴィハラヤのペラヘラ祭は2014年に節目となる50周年を迎えた。もともとこの祭りはヒンドゥ教の雨乞いから始まり、年月を経てキャンディで仏歯を背負ったゾウを行列に加えられるようになったと伝えられる。以来、王権に仏教が結び付き盛大なパレードに発展した。2014年5月15日ポヤデー(満月祭)の翌日の16日、サママハ・ヴィハラヤでは僧俗合わせた寺関係者たちは境内をかけ走り廻るような忙しさであった。前日、

祭の為に用意された材料が運ばれると、専門のクックによって5000人分のカレーが大釜で作られた。このカレーは遠路はるばる参拝に来られる人、祭の手伝いの人、式典準備係らに振る舞って労をねぎらうのだ。

さて、日が沈んだ20時頃、爆竹の音と鞭の大迫力で、ゾウの行道がスタートした。爆竹の音は、「道を広く開けて下さい。みなさん祭にご参集下さって、ご覧下さい」のサインだと私は受け止める。

私たちの席は、ソーマシリ師が前もって檀家の自宅前に用意下さってあったので、落ち着いてゾウのパレードを観ることができた。次の行列は仏旗を持って進んで来た。続く火の踊りは、あかあかと燃え盛る火の輪やトーチを振り廻しながら歩く踊り手たちである。子どもたちも行列に加わり、踊り手たちとともに頑張っている。その次に続くのは、役人だろうか、何かを手を持ってゾウに乗っている。……順々に繰り広げられていくパフォーマンスが続く。

ピンナワラから連れて来られたサママハ・ヴィハラヤのゾウは、この行列の中に…と探してみた。人が沿道にあふれ道路は異様な熱気に包まれて松明の明かりの中を華麗に飾られたゾウが照らし出されるが見分けられない。チャルメラ・ドラム・シンバルなどの楽の音で行進をはやし立てる音楽隊が時として激しいリズムを刻む。ペラヘラ祭実行委員長のソーマシリ師は、あちらのグループ、こちらの見物人と小走りで駆け回り心配りをされていらっしやる。観客は仏教徒ばかりでなく市外や他の州、外国人までを含めると70万人の人出であると云う。

仏舎利を乗せたゾウの前で躍動感に満ちたキャディアンダンスが踊られている。この踊りはもともとは、悪魔祓いの踊りであったらしい。演奏にあわせて、踊り手たちがリズムカルな踊りを披露しながら通り過ぎていった。そして祭のクライマックスの見せ場は何と言ってもきらびやかに電飾されて仏舎利をのせたゾウのパレードである。

ペラヘラ祭のパレードの構成は、各寺院によって多少異なると聞いている。鞭打ち・旗持ち・土地役人・ゾウ厩舎の長・ダンサー・副在家総代・仏歯・あるいは仏舎利を載せたゾウ・在家総代…などと続く。電飾を纏った輝くゾウ、さまざまな表情でパレードを観る人々の群れ…。ペラヘラ祭の賑わいこそ仏教の繁栄を語る尺度のような気がする。

料理講座・インドネシア料理は太陽の味

2017年6月15日(木) 麻生市民館・料理室 講師：ロサリタ

参加者 10名

インドネシアの首都・ジャカルタ出身のロサリタさんを講師に迎えてインドネシア料理の講習会を初めて開催したのは2006年だった。その時は小学生と学齢前のお嬢さんお二人のお母さんだったが、今は、上のお嬢さんはフィンランドの大学に留学中であり、下のお嬢さんは高校生とのこと、更にもう一人、幼稚園生のお嬢さんがいらっしやるそうだ。講師のロサリタさんは以前と変わらず美人で若々しかった。

私が大学を卒業した昭和30年代の東京は、まだエスニック料理のレストランは珍しかった。日比谷に「インドネシア料理・ラヤ」という店があって、友人の、日系二世米国人のお母さんが友人と一緒にその店に連れて行って下さった。その時のインドネシアカレーとガドガドという温野菜のサラダが私のエスニック料理体験の始まりで、以来、ガドガドは私の中で幻の味になった。

2004年暮れに起こったスマトラ沖大地震による大津波の支援活動で、和光大学経済学部教授(当時は准教授)と知り合い、奥さんのロサリタさんが料理が得意と伺って、早速、インドネシア料理の講師をお願いし、念願のガドガドのタレの作り方と共にナシゴレン・プレートをご指導頂いた。既に10年を経ている。‘わんりい’のメンバーも入れ替わったことだし、レシピのレビューをしようとのこと再度ロサリタさんに講師をお願いした。

東南アジア料理とひとくくりにするが国が違えば受



先ず、料理用のペースト作りから

け継がれる民族の味も異なる。しかも、インドネシアは、実は赤道に跨る1万を超える島々から成り立つ多民族国家で、良く知られている島は、首都があるジャワ島の他、スマトラ島、バリ島、ティモール島、ニューギニア島か。その様な訳で一口にインドネシア料理と言っても島々によって料理は異なるようだ。今回は、レシピのレビューということもあり、講習メニューは、インドネシア料理と言えば‘これ

でしょ’的なナシゴレン・プレート(ナシゴレン、アチャル、サテ・アヤム、えびせんの盛り合わせ)、ソトアヤム(鶏手羽先のスープ)、緑豆のココナッツミルク煮のセットにガドガドを添えた。

アジア各国で呼び名は異なるが、小エビを塩漬けし、すりつぶして発酵させたシュリンブペーストを隠し味にしたナシゴレン(ナシ=米、ゴレン=炒める/揚げる)は、いわばインドネシア風チャーハンだが、炒めたシュリ



ンブペーストの香ばしい香りと味わいが夏の味覚にぴったりで、我が家の真夏の食卓に頻繁に上っていた。が、いろいろな食材を混ぜ合わせていた。今回、ナシゴレンの具は、鶏肉だけ、海老だけ、イカだけというように単品なのだと知った。やはり回を重ねて知ることもあるようだ。

ナシゴレンの風味の素となるベースは、ニンニク、玉ねぎ、赤ピーマンなどの野菜をフードプロセッサーにかけてシュリンブペーストと炒めたものだし、アチャル(野菜の酢漬け)が添えられるので、栄養的にバランスがとれている。具は一品の方がナシゴレンの風味を楽しめるのだと理解した。

ナシゴレンの味の決め手になるソースの作り方とアチャルのレシピを後記するので是非試してみたい。その他のレシピは追って‘わんりい’HPに掲載の予定にしている。サテ・アヤム(焼鳥)の



毎回ながら、和気あいあいとした‘わんりい’料理講座のランチ風景

タレなど、ピーナッツたっぷり子どもたちが喜ぶのではないかと考えている。(報告：田井光枝)



もうすぐランチですよ～

炒めたシュリンブ・ペーストの香りがそそるナシゴレン・レシピ

■ナシゴレン(5皿分)

硬めに炊いたご飯……………700g(米、約3合)
 鶏肉(皮なし)……………1枚(今回はエビを使用)
 卵……………5個
 ナシゴレン・スパイシーソース材料(後記)
 調味料：サラダオイル、塩、少々

【作り方】

- 1)卵は半熟の目玉に焼く
- 2)鶏肉は1cm角に切っておく
 ※ 鶏肉でなくむき海老やイカ等相当量でもよい
- 3)ナシゴレンソース準備(材料：後記)
 油を熱し、用意のナシゴレン・スパイシーソース材料を全て入れて炒める。水分がなくなったら弱火にして、あめ色になるまでゆっくり炒めて水分を飛ばす。ねっとりしたペースト状にする(このソースは多めに作って冷凍保存できる)。
- 4)フライパンで油を熱し、鶏肉(又はむき海老)を炒め、ナシゴレン用ソースを加えてしっかり炒め、焼き上げたご飯を加えて十分炒め、最後に塩(顆粒スープの素)

で味を整える。

- 5)皿に盛りつけ、半熟の目玉焼きを載せて供する

■ナシゴレン・スパイシーソース(5皿分)

玉ねぎ/中1個、ニンニク/3片、赤ピーマン1個(赤ピーマンがない時は赤パプリカ1/2個)
 シュリンブペースト/5g(なければ干しエビ茶さじ2)
 ※シュリンブペーストは、タイではカピ、インドネシアではトラシ、マレーシアではブラチャン等と呼ばれ、東南アジア各国で味のベースとして使われる。発酵食品でそのままでは強烈な臭いだが炒めると香ばしいかおりになる。

■アチャル(ナシゴレンに付け合せる野菜、5皿分)

胡瓜…1本、人参(太め)…半本、砂糖…小さじ2
 塩…小さじ1/4、酢…大さじ2～2.5
 ▲きゅうりは両端を落として2つに切り、更に縦に5等分
 ▲先端を落として縦に5等分
 ▲調味料を全部合わせて漬け置く(一晩寝かせた方が美味しい)

中国現代画家・王新の心象風景【妙行無住】

作家の画風から現代中国絵画の現状を知り、中国現代絵画への理解を深める

日中友好会館・美術館 <http://www.jcfc.or.jp/>

2017年8月18日(金)～22日(火) 10:00～17:00 (初日15:00/最終日16:00)

- **王新プロフィール** ペンネームは「木人石」。1964年、河北省に生れる。1991年、四川美術大学卒業。国家一級美術家(教授)、現在、北京・ニューヨーク両地で活躍中

- **主催**：NPOチベット高原初等教育・建設基金会
- **共催**：日本中国友好写真協会/日中友好会館・文化事業部国際交流協会 ● **後援**：中国大使館ほか
- **問合せ**：NPOチベット高原初等教育・建設基金会事務局
☎ 03-5912-1232 E-mail:wusa@gesanmedo.or.jp

町田国際交流センターの催し(講演会2題)

その1「どこが世界三大料理？」 ～トルコの食文化とその成り立ち～

トルコ料理の「バラエティ」の源となる文化的・歴史的理由と共に、材料・調理法・地方料理・宮廷料理などについて語る

- 2017年7月28日(金)、18:30～20:30(開場18時)
- 町田市民フォーラム3Fホール

その2「日中関係を考える」

中国のGDPは2015年、既に日本の2.7倍。アメリカに追いつく日が射程内に入ったと言えるでしょう。今回は中国経済の専門家を迎えて、経済のみならず、中国の政治や社会等を幅広く話してもらいます。

- 2017年7月23日(日) 14:00～16:00(開場13:30)
- 町田市民フォーラム3Fホール

- ◆ 申込は、それぞれ①住所、②氏名、③電話番号、④参加人数を記入の上、Fax 又は町田国際交流センター HP へ Fax:042-722-5330 町田国際交流センターHP：www.machida-kokusai.jp
- ◆ 問合せ：☎ 042-722-4260 町田国際交流センター

麻生市民館利用団体による あさおサークル祭2017

- 2017年7月22日(土)・23日(日) ● 場所：川崎市麻生市民館全館(小田急線新百合ヶ丘北口3分)

■ 'わんりい'参加のプログラム(ご自由参加ください)

- 7月23日(日)視聴覚室 10:30～12:00

講演『論語』から学ぶ言葉の力 **参加無料**

講師：植田渥雄(桜美林大学名誉教授)

孔子はうわべだけの美辞麗句を嫌い、実のある行動を重んじた人です。しかし、実は、誰よりもコトバを重んじ、どこまでもコトバの力を信じる人でした。改めて『論語』からコトバの力を学んでみたいと思います。

論語というと難しそうな響きがありますが、2011年秋より、'わんりい'漢詩の会・講師として、ユーモアある楽しいお話で講座参加者を魅了する植田先生が、分かり易くかみ砕いて論語の世界に案内くださいます。

■ 植田渥雄先生略歴

1937年、岡山市生まれ。東京大学文学部卒業
元桜美林大学教授、元NHKラジオ中国語講座担当講師、現桜美林大学孔子学院講師、現桜美林大学名誉教授

- 問合せ：☎ 090-4422-1374 (わんりい)
E-mail:ukiuki65jppj@yahoo.co.jp

- 7月23日(日)視聴覚室 13:30～15:00

《ボイス・トレ体験講座》 **参加無料**

ボイス・トレをして日本の歌を美しく歌おう!

講師：EMME⁺(歌手)

身体の緊張を解いて、思いっきり声を出してみよう! トレーニングの後は気持ちよく「夏の思い出」を一緒に歌おう! きっと心が清々しく晴やかになりますよ。外国の皆さんも大歓迎です。

※動きやすい服装でご参加ください



2016 あさおサークル祭での体験風景

- 問合せ：☎ 090-4422-1374 (わんりい)

◆わんりいの講座

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

- ▲ 7月9日(日) まちだ公民館 第3・4学習室
- ▲ 時間:10:00～11:30 ※8月の講座はお休みです
- ▲ 講師:植田渥雄先生

(桜美林大学名誉教授、
現桜美林大学孔子学院講師)



- ▲ 会費:1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲ 定員:20名(原則として)
- *録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆ 申込み: ☎090-1425-0472(寺西)
E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

◆わんりいの講座

ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

- まちだ中央公民館 視聴覚室
- 7月25日(火) 10:00～11:30
練習曲「夏の思い出」(江間章子作詞/中田喜直作曲)

- 8月22日(火) 10:00～11:30
★動きやすい服装でご参加ください

- 時間 10:00～11:30
- 講師:Emme(歌手)
- 会費:1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員:15名(原則として)

◆ 申込み: ☎042-735-7187(鈴木)
E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



初心者のための【鶴川水墨画教室】 体験のお誘い

- 講師:満柏(日中水墨協会会長)
- 会場:鶴川市民センター (195-0062 町田市大蔵町1981-4 駐車場有り)
- 曜日と時間:第2又は第4月曜日 14:00～16:00
- 体験参加費:1000円(見学無料/手ぶら参加可)
- ◆ 問合せ: ☎042-735-6135(野島)



中国文化センター・中日文化シリーズ講座 第3回

[講演会]中国をどう捉えるべきか

日本人学生が自由記述の形で開示した「中国に対する認識」の一部を例とし、日本人学生がどのような視点でどのように中国を見ているかをふまえ、考えるべき問題と解決後の可能性をさぐり、中国への理解を深めることを目的とします。

- 7月14日(金) 15:00～16:30
- 会場:中国文化センター、定員80名(先着順)
- 講師:盧濤(使用言語は日本語)

盧濤:1996年神戸大学大学院博士課程修了/広島大学大学院社会科学部研究科教授/広島県華僑華人総会会長/東京大学大学院情報学環・学際情報学府客員研究員

申込と問合せ: ☎03-6402-8168 中国文化センター

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでに折に田井にお渡し下さい。

画彩の詩(うた) ～中国実力派女流画家二人展

<http://www.shinagawa-culture.or.jp/hp/menu00000300/hpg00000217.htm>

- 7月26日(水)～31日(月) 10:00～18:00
(初日13:00から、最終日16:00まで)
- 品川区民ギャラリー(イトーヨーカードー大井町店8F)
JR京浜東北線・東急大井町線・りんかい線大井町駅徒歩2分
- 【出品者】★イエリン(叶霖):中国魯迅美術大学グラフィック学科卒業1991年来日。企業宣伝部デザイナーを経て、画家、デザイナー、作家として活躍中
- ★シュウリピン(鄒麗萍):中国軽工業管理学院デザイン科卒業1997年来日。東京Muuアート会会員、(株)エム・ピー・シー(出版社)に勤める。

◆ 問合せ:品川画友会 ☎080-4953-1688(シュウ)

国際フェスティバル in 代々木公園

<http://www.yoyogipark.info/>

- ブラジルフェスティバル2017、7月15日(土)→16日(日) 11:00～20:00 ▲ イベント広場
- 美味しいペルー 2017、7月29日(土)→30日(日)
▲ イベント広場&ケヤキ並木
- 台湾フェスタ 2017、7月29日(土)→30日(日)
▲ イベント広場野外ステージ

[7月・8月定例会開催日及び7月号おたより発送予定日] ◆ 問合せ: ☎042-734-5100(わんりい)

- 7月の定例会:7月11日(火) 13:30～ 三輪センター・第5会議室
- 8月の定例会:8月7日(月) 13:30～ 三輪センター・第3会議室、定例会はどなたでも参加できます。
- 9月号おたより発送日:8月30日(日) 10:30～
- 場所:三輪センター・第3会議室
- ※ おたより発送日はお弁当を持参ください。



ベトナム留学生・タンちゃんのレシピで交流しよう ベトナム料理は日本の里山の味がする!?



▲2017年7月17日(祝)10:30～14:00 ▲場所：麻生市民館・料理室
(川崎市麻生区万福寺1-5-2/小田急線新百合ヶ丘駅北口徒歩3分)

- メニュー：①フォー・ポ(牛肉のフォー)/②生春巻き/③鶏肉のレモングラス炒め/④青いパイアのサラダ/⑤バナナ チュー(バナナのココナッツミルク煮 タピオカ入り)他
- 参加費：1500円(会場費・材料代) ※定員：先着15名(申し込み締め切り：7月13日/木)
- 持物：エプロン 筆記用具、自分用の布巾、プラスチック容器(持ちかえり用)

◆申込&問合せ：☎042-734-5100(わんりい) E-mai：wanli@jcom.home.ne.jp

ベトナムから大東文化大学に留学していたファム クオック タンさんから初めてベトナム料理を教えて頂いたから15年になります。ベトナム料理といえば、ライス・ヌードルのフォーで、「フォーはどのような材料を準備しますか」と伺ったら、開口一番、「フォーは出汁が決め手です。鶏ガラ1kg、豚の骨1kg、牛の骨1kgを用意して下さい」とのこと。豚骨、牛骨など見たことがない料理講座担当の一同、思わず顔を見合わせて「エッ!？」と絶句しました。その頃、新宿職安通りに「韓国広場」という、主に韓国料理の食材を扱うスーパーがあり、韓国料理に詳しい会のメンバーからブイヨン用の骨がそこに売っているとのことを伺って買い出しに行きました。タンさんのご両親は首都・ハノイでレストランを経営、タンさんはその舌を見込まれて、その頃新大久保にあった百人町屋台村のベトナム料理のブースでアルバイトをしていました。そんなで彼のベトナム料理は本格的な味わいがありました。

会のメンバーたちからタンちゃんと呼ばれて交流が続いていましたが、卒業後は姫路の方に就職され、その後の消息がなくなりました。7月の料理の会は、「わんりい」会員同士の交流活動として、タンさんのレシピをもう一度忠実にレビューしてみたいと思っています。皆様のご参加をお待ちしています。(田井)

- 9月の料理講座は有為楠君代さん指導で、手づくりの美味しい月餅の講習を予定しています。焼き立ての月餅を味わってみたい皆様には、日取が決まり次第お知らせします。有為楠さん宛ご連絡下さい。☎090-442-1374 E-mail：ukiuki65jpp@yahoo.co.jp



【わんりい料理の会】へのお誘い

‘わんりい’料理講座は中国料理だけではなく、会活動開始(1992年)の頃、まだなかなか味わう機会が少なく、レシピも手に入れるのが難しかったアジア各国の料理を、現地出身の皆さんに教えて頂くことで始まりました。

当初の頃は手に入らない調味料や食材などの調達に苦労しながら、日本人好みの味に妥協しない現地の味そのままをということで教えて頂き、食を通してその国を知る切っ掛けもなりました。既に100回を超えていて、レシピを納めたファイルが何冊にもなりました。

今は調味料も食材も無理なく揃えられます。時には初心に戻って、講師なしでオリジナルの味をレビューしてみたいと思います。きっと日常の食卓を豊かにする何かが見つかる筈です。ご一緒に如何でしょうか。(田井)

‘わんりい’ 225号の主な目次

「寺子屋・四字成語」雑感(2)一鳴驚人	2
論語断片(28)父は子の為に隠し、子は父の為に隠す	3
大連・鞍山・本溪の旅(その1)	4
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(15)	6
東西文明の比較(16)	8
消え去りゆく北京の路地裏・胡同への思い(2)	10
黄土高原に咲く彩なる花々(1)	13
「漢詩の会」報告(13)漢詩創作のルール④創作法最終稿	16
スリランカ紀行(19)ピンナワラ・ライフ	18
【料理の会・報告】インドネシア料理は太陽の味	20
香りがそそるインドネシア炒飯・ナシゴレンレシピ	21
わんりい掲示板	22・23・24